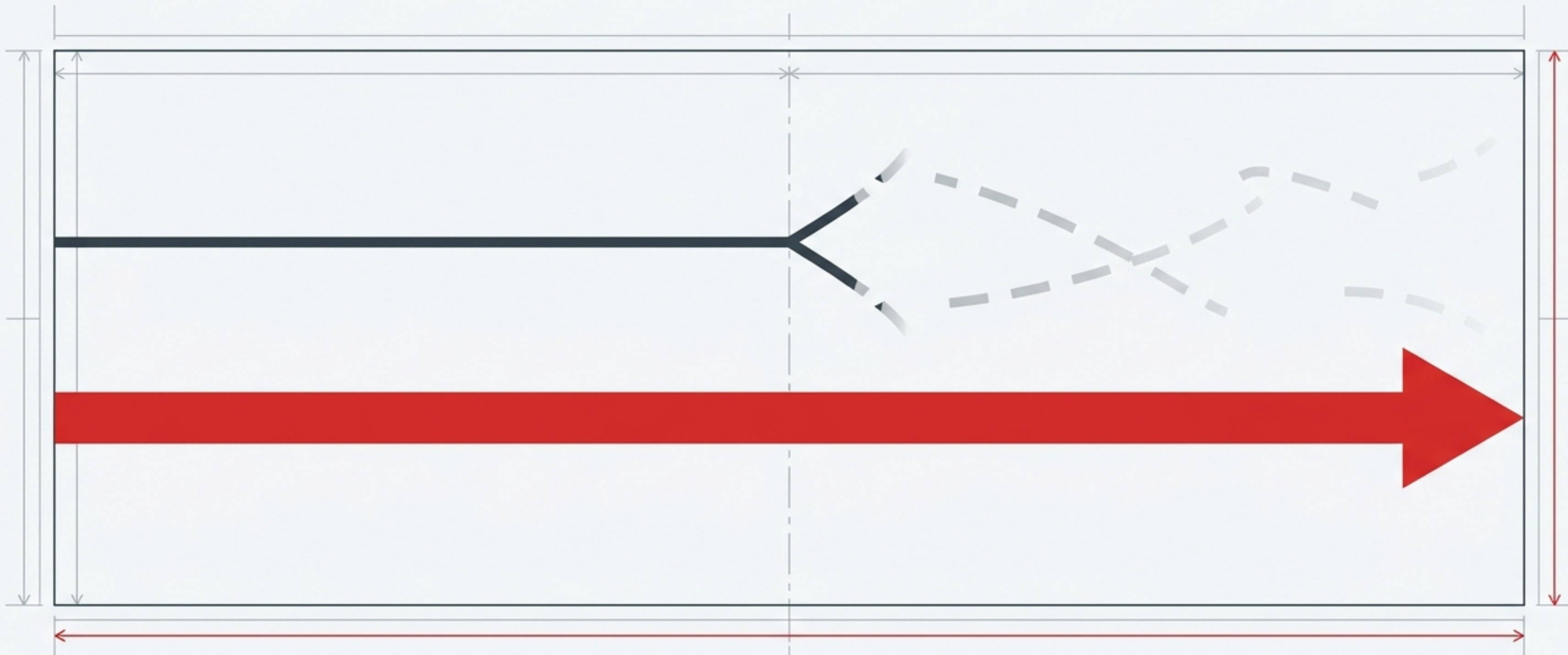
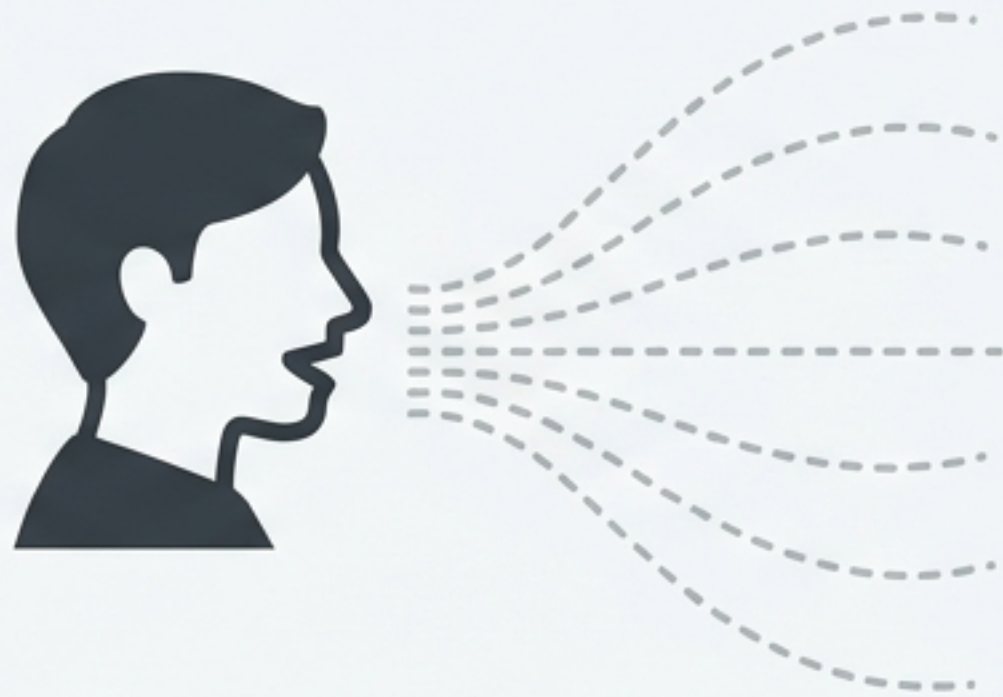


言葉を最後まで運ぶ者が、真の信頼を掴む

「○○ですけど」に隠された甘えの構造と、現実を動かすコミュニケーションの本質



配慮を装った「語尾の濁し」が、聞き手の脳を激しく消耗させる



「やわらかく伝えているつもり」



「言葉の処理責任の丸投げ」

日常会話で多用される「〇〇ですけど……」。本人は角を立てない配慮のつもりでも、それは対等なコミュニケーションではありません。

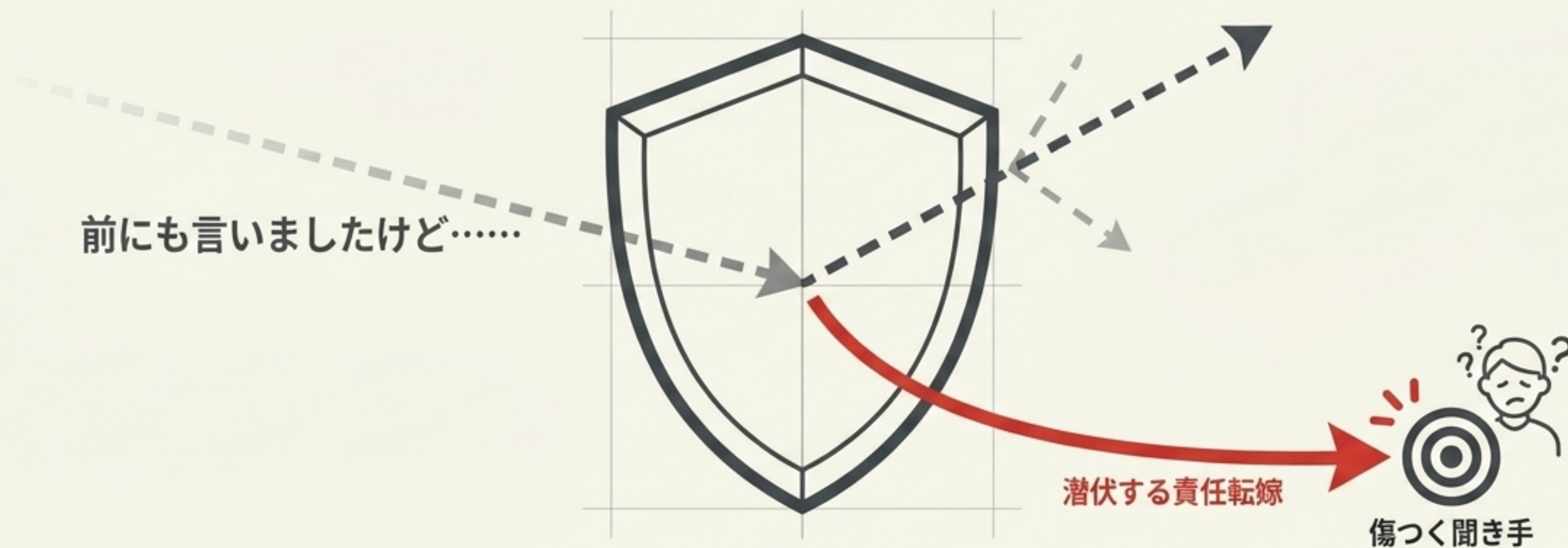
自分の言葉を未完成のまま、相手の脳へ不法投棄している状態です。

聞き手の脳の無断借用：続きを相手に「生成」させる不誠実



語尾を濁す行為は、材料だけを投げて組み立てを相手に任せる「聞き手の脳を使った文章生成」です。
この終わりのない補完作業こそが、相手をイライラさせる正体です。

曖昧さに隠された「いやらしい責任回避」の盾



「○○ですけど」の最も厄介な点は、責任の所在の消去です。相手を暗に責めながらも、最後まで言い切っていないため「そんなつもりじゃなかった」と逃げる余地を残す。これは極めて都合の良い自己防衛の構造です。

前向き風の罨：「思っているんですけど」に潜む自己防衛の構造

偽りの前向き言葉

隠された本音と防衛 

現実を動かす言葉 ✓

「やりたいとは思っているんですけど」

「まだやっていないが、やる気ある人間として扱ってほしい」

「今日やります」

「負けないとは思っているんですけど」

「相手が強かった、調子が悪かったという言い訳の逃げ道を残したい」

「負ける条件を徹底的に潰す準備をします」

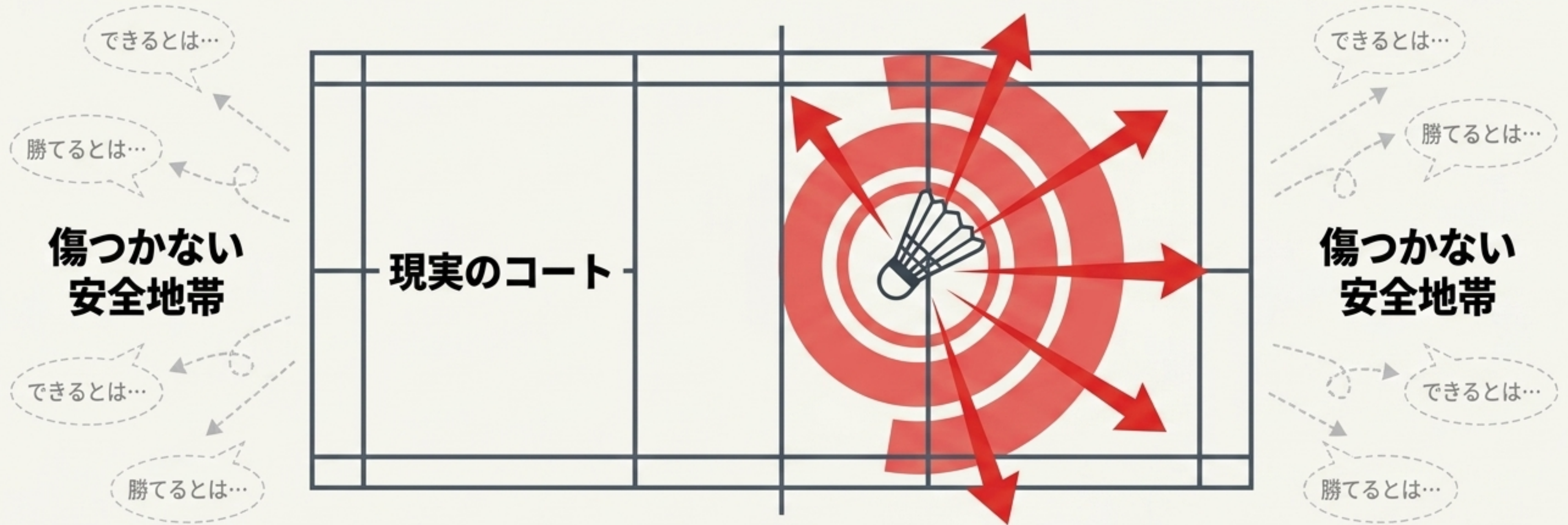
「できるとは思っているんですけど」

「失敗して、できない自分を突つけられる恐怖から逃げたい」

「証拠と手順を示します」

「思っている」だけの段階では、外側の世界は1ミリも変わっていません。

現実のコートは「内なる美しい意図」を一切評価しない



スポーツでもビジネスでも、メンタリティの差は残酷なほど明確にスコアとして表れます。
現実には「思っているかどうか」の綺麗さではなく、具体的な行動にしか反応しません。

可能性の中から這い出し、泥臭く現実に触れに行く

Panel 1

× 「打てるとは思っているんですけど」



○ 「正しく打てているかわからないので、見てもらえますか？」

Panel 2

× 「拾えるとは思っているんですけど」



○ 「一歩目の足が出にくいので、出し方を教えてくださいませんか？」

Panel 3

× 「勝てるとは思っているんですけど」



○ 「勝てるかどうかかわかりません、あなたはどのように思いますか？」

弱い人ほど傷つかない可能性（未完成の言葉）の中に隠れ、
強い人ほど厳しい現実の中で自分を一度壊し、再構築していきます。

目的地へのルートは、正確な「現在地」を打ち込んだ瞬間にのみ描かれる



未完成の前向きさで相手を煙に巻くのはやめましょう。「まだやっていない。今はできない。ここが分からない。でも、ここから始める。」そう潔く現在地を認めることこそが、最も強力で誠実なコミュニケーションです。

現実に対して1ミリの支払いもしていない状態からの脱却



「可能性という傷つかない安全地帯に引きこもり、現実に対して税金を一切払っていない状態。そこにしがみついている限り、どれほど高度な指導を受けても、シャトルが相手コートに沈むことは絶対にありません！」

—— レン (Phoenix-Aichi)



【実践】相手の脳を削らないための「言葉の運搬法」

違うと思うとき

✕ 「違うと思うんですけど……」

○ 「私は違うと思います。理由はこの3つです」

前もって伝えていたとき

✕ 「前にも確認しましたがけど……」

○ 「前にも確認しましたが、まだ共有されていないため、もう一度確認させてください」

ミスや誤解を指摘されたとき

✕ 「そんなつもりじゃなかったんですけど……」

○ 「説明が不足しており申し訳ありません。私の意図はこうでした」

会話は察してもらう場ではなく、結論を最後まで届ける技術である

「〇〇ですけど」で止める人は、
言葉の責任を相手に押しつけている。



言葉を最後まで自分で運ぶ覚悟が、
現実との接触を生み、
本当の強さを目覚めさせる。